

令和元年6月18日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04067

研究課題名(和文)日本の青年における「主体的な人生形成」の様相について

研究課題名(英文) Ambiguous aspects of "being self-determined" among Japanese adolescents

研究代表者

中間 玲子 (Nakama, Reiko)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：80343268

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：中学および高校の時期において、自分というものを見極め、自分らしい人生を形成したいという意欲は高まること、それは特に、進路決定課題と相互に影響し合いながら進むことが明らかにされた。自分の価値観や生き方の答えをもっていることが進路決定にもプラスの影響を与えることが示され、目の前の進路決定という課題をより広い視野でとらえ、取り組むことの意義が示唆された。ただし、そのような意識の一方で、他者と協調したいという意識はずっと高く保たれるのも特徴であった。「主体性」といいながらも、他者との葛藤を避ける選択肢を暗黙の前提としている可能性も指摘された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義の第一は、まず、10代におけるアイデンティティ発達の様相を横断的・縦断的に検討し、その特徴を明らかにした点である。そこから、中高一貫校も含め、進路選択という“節目”において、アイデンティティ発達が促されることが確認された。

第二は、そのような個を基調とする自己意識の発達が、協調性への意識の高さを低下させることなく進むことを明らかにした点である。そしてそれらは、個人の内面において両立・統合、あるいは葛藤した形で、独自の自己意識の様相を形成していた。

研究成果の概要(英文)： This study confirmed that the desire to identify oneself and to form the way of life by their own perspective develops during the time of the junior high school and the high school. It advances with mutual influence with the course decision task.

However, the score of an interdependent person were kept higher among their adolescents. In their case, the meaning of being independent were dealt with ambiguously.

研究分野：発達心理学

キーワード：青年期 自己意識 アイデンティティ 自己観

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人生形成における「主体性」は、日本ではもちろん、世界的にも重要な関心事となっている。現在、人生形成の主体は、組織や国家ではなく、個人に他ならないという意識を強くもつことが重要となっている(金井,2002)。この意味での主体性は、発達の文脈との兼ね合いで特に青年期から成人期にかけて形成されるべきものとされ、教育面における重要課題ともなっている。心理学は、「主体性」の問題に様々な角度から取り組んできたが、「主体性」の問題が十分に検討されたとは言いがたい。特に、発達の観点を用いた検討や文化を考慮した研究は不足している。そこで、「主体的な人生形成」を検討課題とする。なお、青年期の自己意識の発達過程を考えると、「主体性」の様相には発達に伴う変化が想定される。加えて、文化的自己観との兼ね合いで、「主体性」概念の実態について再考する必要がある。これらもふまえた検討を進める。

2. 研究の目的

本研究は、日本の青年期における主体性の発達の実態をとらえと共に、それが実際の人生形成においていかにつながるのかを明らかにすることを目的とする。本研究で検討する問題意識は、以下の2点にまとめられる。

(1)主体性の感覚はどのように発達するのだろうか。

(2)主体性の感覚は、個別存在としての自己の意識に根ざしたものであるが、日本人の自己意識において「主体性」はどのようなものとして認識されているのだろうか。

この2つの問題意識から日本の青年の「主体性」の実態をとらえ、主体的な人生形成はいかなる場合に可能となるのかを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(検討課題1)「主体性」の発達過程の検討、(検討課題2)文化的要因を考慮した「主体性」の検討、の2つの具体的課題を設け、それぞれについて調査によって検討を進めた。検討課題1は、主に対象が10代~20代となることから、教育機関との協力体制を築き、学校の協力によって調査を実施する方法を中心に、横断的あるいは縦断的な調査を実施した。また、検討課題2については、教育機関における調査に加え、インターネット調査も活用した。調査協力校については、すでに関係ができあがっている中学校および高校に対し、引き続いての協力をお願いした。

4. 研究成果

検討課題ごとに以下に示す。

検討課題1 (1) 後期児童期から青年期中期にかけてのアイデンティティ発達の様相に関する横断的研究

小学6年生から高校3年生までの10代の間に、アイデンティティ発達の様相は、「いつ」「どのように」はじまるものであるのか、①その得点変化の様相、②自己意識をはじめとする他の青年期発達の要素との関連、についての横断的調査から検討した。調査内容は、DIDS-J、自己意識特性尺度、および注意を向ける自己の領域(学業能力、運動能力、その他の能力、性格、外見、価値観、将来目標、生活スタイル、友人関係、恋愛関係、親子関係)、時間的展望、自尊感情。調査対象は、小学4年生から高校3年生までの3,290名。ただし、DIDS-Jについては、小学校6年生以上の学年を対象とした。

【結果】1. DIDS-Jを用いた発達過程の検討 DIDS-Jの“コミットメント形成”と“広い探求”について検討した。変数および学年を要因とした混合計画の二要因分散分析を行ったところ、交互作用が有意であったため、単純主効果の検討を行った。小6、中3、高1、高2において変数の単純主効果が有意であり、小6においてはコミットメント形成がより高い値を、その他の条件においては広い探求がより高い得点を示していた。また、両変数において学年の単純主効果が有意であり、コミットメント形成、広い探求ともに、小6において最も得点が高く、中1において急激に得点が低下することから、中1あたりから、アイデンティティ発達過程が開始されると考えられた。また、急激に低下したところから中2時点が最低得点となり、その後、上昇していくこと、特に、中2から中3にかけて、高2から高3にかけて、得点が有意に高くなること示された。

2. 自己についての考え方との関連

自己のどの領域について考えるのか、の程度と、DIDS-Jとの関連を検討した。それに先だち、どの領域についてよく考えているのか、クラスター分析によってタイプ分けを行った。その結果、「学校課題領域」「個人達成領域」「関係性領域」が高いタイプに加え、「全て高い」および「全て低い」群とが抽出された。その5タイプとDIDS-J得点との関係を調べたところ、両得点ともに、「全て高い」>「個人達成領域」>「関係性領域」の順に高かった。また、自己意識特性(公的自己意識、私的自己意識)、self-esteemとDIDS-Jの関連を重回帰分析によ

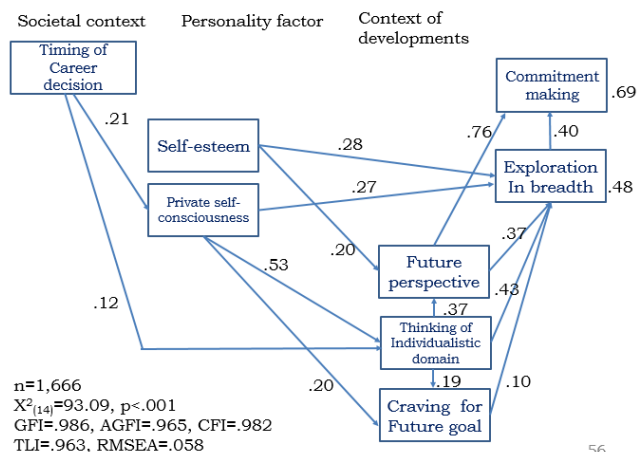


Figure 1 社会的文脈・個人特性・青年期発達を経てアイデンティティ発達へと至るモデル

って検討したところ、私的自己意識が最も強い関連を示した。

**3. コミットメント形成を目的変数とした差異の意識構造モデル** いかなる青年期発達の様相が関連するのか、モデルによって検討した。コミットメント形成、広い探求、いずれも、社会的文脈（進路選択）、個人特性（自尊感情、私的自己意識）、青年期発達（時間的展望、将来への関心）がアイデンティティ発達に至るモデルを検討し、その適合度を検討した。

最終的に、広い探求とコミットメント形成を合わせた総合的なモデルを得た（Figure 1）。個人の自己意識の高まりが、青年期発達の文脈と重なり合うことでアイデンティティ発達が進むと考えられた。

#### 検討課題1 - (2) 日本の高校生のアイデンティティの様相

EPSI 5th を用いて、日本の高校のアイデンティティの様相について検討した。調査対象は高校3年生 3,045名（男子 1,881名、女子 1,164名、不明 89名）であった。

**【結果】アイデンティティの様相** 平均値は統合が 3.17(SD=0.66)、混乱が 2.78(SD=0.68)であり、統合得点が有意に高かった ( $t_{(2705)}=19.06, p<.001$ )。また、進路決定状況によって対象者を就職決定、進学決定、未決定の3群に分け、また、性差の可能性を考慮し、EPSIのそれぞれの得点について、2要因による分散分析にて検討した。その結果、交互作用は有意ではなく、進路決定状況および性の主効果はいずれも有意であった。進路決定状況についての結果は以下の通りである。統合 ( $F_{(2,2561)}=7.81, p<.001$ ) は、未決定群よりも進学群が有意に得点が高かった。混乱 ( $F_{(2,1589)}=12.11, p<.001$ ) は、未決定よりも就職・進学が有意に得点が高かった。また、性の主効果（統合:  $F_{(1,2561)}=24.40, p<.001$ ; 混乱:  $F_{(1,2680)}=3.99, p<.05$ ) も有意であり、いずれも男子の方が得点が高かった。

#### 検討課題1 - (3) 高校生のアイデンティティ発達と進路選択との関連

高校生段階におけるアイデンティティ発達の様相をとらえ、その時期および進路決定との関連を明らかにする。アイデンティティ発達の指標は DIDS25 項目を用いた。調査対象は関西圏にある高校に在籍する2つの学年群。それぞれ A 群、B 群とし、A 群は、1年生の冬、2年生の春、2年生の夏、2年生の冬に、B 群は、2年生の冬、3年生の春、3年生の秋、3年生の冬に、いずれも4回にわたる調査に回答した。各群の各回における回答者数は A 群は 1,697~1,977名、B 群は 1,351~1,613名であった。

**【結果】1. アイデンティティの得点変化の様相** DIDSの5下位尺度が、それぞれの時期においてどのような値を示すのかを図示したところ、Figure 2, 3の通りであった。それぞれのコホートにおいて、各時期による得点の変化を検討したところ、いずれの群でも、得点差はすべての下位尺度において有意であった。

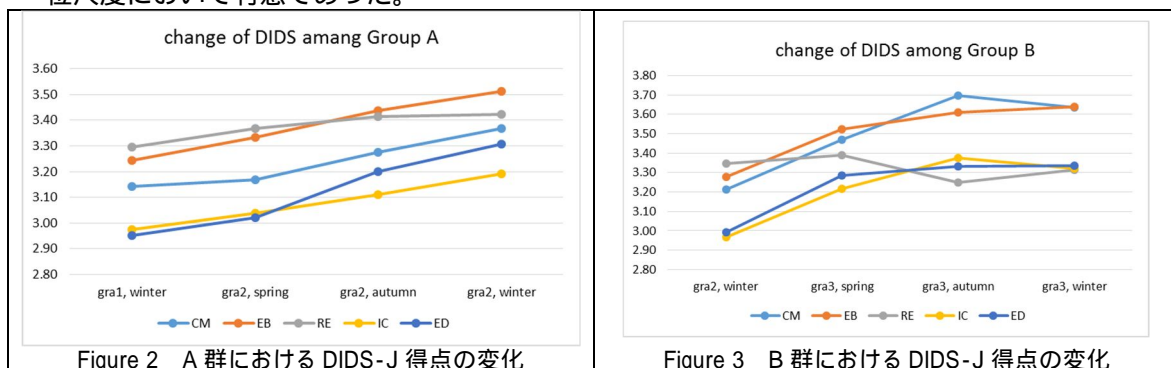


Figure 2 A 群における DIDS-J 得点の変化

Figure 3 B 群における DIDS-J 得点の変化

**2. アイデンティティ地位の変化** アイデンティティ地位をとらえるため、DIDSの5下位尺度の得点を用いたクラスター分析（Ward法、平方ユークリッド距離）を行った。デンドログラムの形状から5クラスターを抽出し、それぞれ、1.CD（Carefree Diffusion; 無問題化型拡散）、2.UD（Undifferentiated, 未分化）、3.DD（Diffused Diffusion, 拡散型拡散）、4.AM（Achievement moratorium: 達成モラトリアム）、5.FC（Foreclosure, 早期完了）と理解された。

各クラスターに該当する者の割合を、各調査時期ごとにとらえ、時期によってその割合に変化が見られるかを  $\chi^2$  検定によって検討した。A 群および B 群における人数の差は有意であり（A 群:  $\chi^2(12)=112.76, p<.01$ ; B 群:  $\chi^2(12)=174.02, p<.01$ ）、全体的な傾向としては、時間経過と共に、アイデンティティ地位は、拡散の者が多い状態から達成モラトリアムの者が増加する方向へと変化することが明らかになった。

#### 検討課題1 (3) 高校生におけるアイデンティティ発達の様相

高校生活においてアイデンティティはどのような発達の様相をとげるのか、学校の特徴（進学系、職業系、工業系）を考慮しながら検討した。調査内容は DIDS-J、および進路決定の程度であった。調査対象は、公立の高校7校（普通科が中心の進学系高校2校、看護や福祉などの職業系高校1校、工業高校4校）に在籍する高校生 1,362名。1年生から3年生まで、年に1度の追跡調査を行い、3回の調査において回答もれの無かった者は760名（進学系 292名(M=95, F=197)、職業系 126名(M=48, F=77)、工業系 343名(M=296, F=47)）を分析対象とした。

**【結果】1. DIDS-J 得点の変化** DIDS-Jについては、5下位尺度間の相関を鑑み、コミットメント形成とコミットメントとの同一化を合計したコミットメント得点、広い探求と深い探求とを合計した探求得点、反芻的探求の反芻得点の3得点とした。それらの得点の推移について、

学校種と時期との二要因分散分析を行った。

その結果、探求得点については、交互作用が有意であり、進学系においては高1から高3にかけて、すべての学年間で有意な得点差が見られ、学年が上がるにつれて得点も高くなっていった。それに対して職業系および工業系においては、高校1年のみが高2、高3よりも有意に得点が高いという結果であった。また、高1時点において、職業系が他よりも得点が高いであった。

コミットメント得点についても、交互作用が有意であった。進学系および工業系においては高1から高3にかけて、すべての学年間で有意な得点差が見られ、学年が上がるにつれて得点も高くなっていった。職業系においては、高校1年と高校2年時に差がなく、高3において有意に得点が高かった。また、高1時点において、職業系が他よりも得点が高いであった。

反芻得点については、交互作用および学校種の主効果は有意ではなかった。時期のみ有意な主効果が示され、高校2年時において、有意に得点が高かった。

進路決定については、交互作用が有意であった。進学系は、高1 < 高2 = 高3、職業系では高1 = 高2 < 高3、工業系では、高1 < 高2 < 高3という結果であった。いずれの時期においても職業系の得点が高いであった。

**2. アイデンティティ発達と進路選択との関連構造** アイデンティティ発達と進路選択の様相との関連について、共分散構造分析によって検討した。学校種を群とした多母集団因子分析による検討を行い、測定不変モデルを採用した。結果は、Figure 4の通りであった。進路選択よりもアイデンティティ発達が先行すること、探求からコミットメント形成を通して、進路選択に寄与するようであることが示された。また、反芻得点が次の時点における進路選択や広い探求に弱いながらも有意な関連を示していたことから、反芻的探求における、発達を促す潜在性についても示唆された。

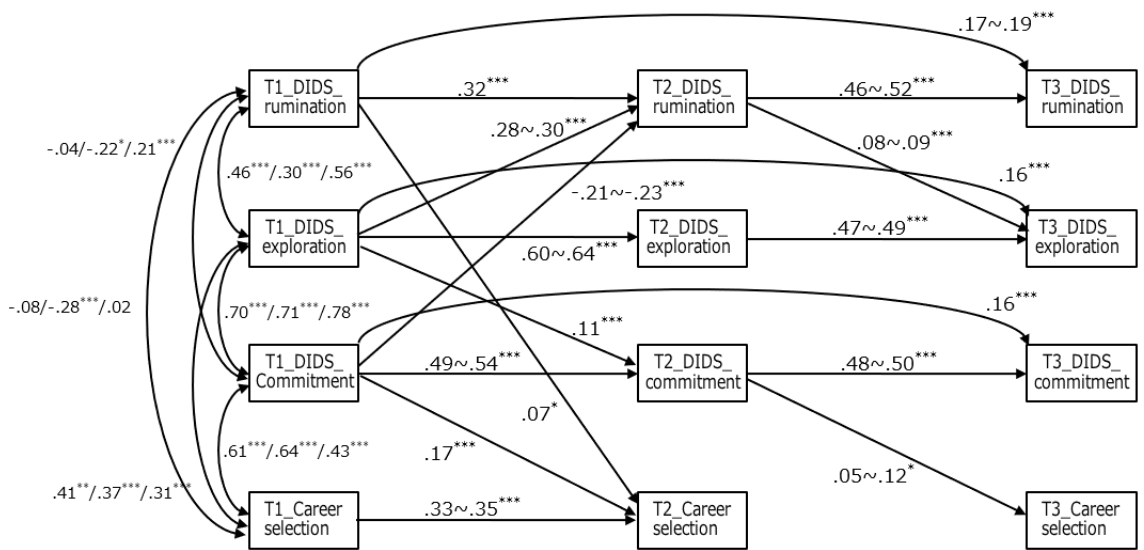


Figure 4 高校3年間におけるアイデンティティ発達と進路選択の関係モデル

検討課題 2 - (1) 青年期の自己意識の発達の变化：相互協調的自己観・相互独立的自己観の様相の検討

青年期の自己意識の変化について、相互協調的自己観・相互独立的自己観の様相の点から検討を行う。あわせて公的・私的自己意識特性の様相についても検討する。調査内容は児童向け自己意識特性尺度（桜井，1992）より予備調査を経て選出された12項目、相互独立性・相互協調性尺度（Uchida & Kitayama, 2004）20項目など。調査対象は小学生1,489名、中学生1,224名、高校生2,985名の計5,698名。

**【結果】1. 自己観の様相** [性別×学校種×自己観]の3要因による得点の差異を検討したところ、2次の交互作用が有意であったため（ $F_{(2,4887)}=7.44, p<.01$ ）、単純交互作用の検討、単純・単純主効果の検討を行った。その結果、学校種の単純・単純主効果は男子でのみ有意（小<高,  $p<.001$ ）であったが、協調的自己観においては男子（小<中<高,  $p<.001$ ）、女子（小・中>高,  $p<.05$ ）いずれでも有意であった。また、どの学校段階においても独立的自己観（男子>女子）、協調的自己観（男子<女子）における性の単純・単純主効果が有意であった。また、男子小学生を除き、変数の要因（独立<協調）の単純・単純主効果が有意であった。

**2. 自己意識特性の様相** 自己意識特性についても同様に検討したところ、2次の交互作用が有意であった（ $F_{(2,4910)}=21.73, p<.001$ ）。単純交互作用の検討、単純・単純主効果の検討を行った結果、学校種の単純・単純主効果が有意であり、男子では公的・私的ともに小<中、高、女子では公的は小<高<中、私的は小<中<高であった。性の要因（公的・私的問わず男子<女子）、変数の要因（男子は公的<私的、女子は公的>私的）の単純・単純主効果も有意であった。

なお学校種・性別を問わず、私的自己意識は両自己観と有意な正の関係（独立： $r=.28\sim.48$ ；協調： $r=.23\sim.43$ ）、公的自己意識は協調的自己観と有意な正の関係（ $r=.66\sim.73$ ）を示した（ $p<.001$ ）。

以上より、中学校段階にかけて男女別々の様相で自己意識が高まるが、いずれも協調的自己観



を優勢となる方向と関連すると考えられた。中学校段階において、人間関係の維持を最優先させる形で自律性が高められることが示唆された。

## 研究2 - (2) 日本人の主体性の様相の検討

個人が掲げる理想自己において、自己実現という課題がどのように成立しているのかをとらえる尺度を作成し、それがアイデンティティ発達や社会への意識のあり方とどのように関連するのかを検討した。調査内容は、理想自己の内容、文化的自己観に関する尺度、社会に対する意識の項目、アイデンティティ発達に関する3つの指標(アイデンティティ・ホライズン(IH)尺度、アイデンティティ・スタイル(IS)尺度、EPSI)であった。調査対象は、18~25歳の男女367名(平均年齢22.03歳;女子51.5%;学生51.2%)。インターネット調査であった。

【結果】1.理想自己の項目 探索的因子分析より、「優越志向」「実現志向」「抑制志向」「標準志向」の4因子を抽出し、因子得点を算出した。

2.アイデンティティおよび社会への意識との関連 優越志向・実現志向は、アイデンティティ発達と方向性が重なり合うところが大きいようであった。抑制志向・標準志向については、アイデンティティ発達の指標とは負の関連もいくつか示された。特に抑制志向は、アイデンティティスタイルの情報志向との負の関連、アイデンティティ不安およびEPSI 混乱との正の関連を示しており、アイデンティティの混乱と関連することが示された。また、優越志向はアイデンティティスタイルにおける規範傾向との関連も中程度の値を示していた。

社会に対する意識は「関係回避志向」「貢献意欲」「投げやり」「異質性関心」「異質性拒否」の5因子が抽出された。それらの得点と、価値観項目の得点との関連を検討したところ、全志向において、弱いながらも関係回避との有意な正の関連が示された。協調性に関しては、いずれの変数も有意な正の関連を示していたのだが、同時にそれらは、人は人、自分のことで精一杯、という意識とも有意な正の関係にある項目であったということである。貢献意欲については、優越志向、実現志向、抑制志向と正の関連にあることが示された。ただし、抑制志向は、関係回避、投げやり、異質性拒否とも有意な正の関連、異質性関心とは有意な負の関連にあることから、無力感に裏打ちされた、社会への服従としての貢献意欲とも考えられた。また、実現志向は、異質性関心と共に異質性拒否との有意な正の関連を示しており、矛盾した心性がうかがえた。

自己実現の追求過程を難しくさせる他者の存在に対しどのように向き合うのかについて、他者との協調性を優先して自己実現を放棄する、他者に対立するとしても、自己実現に向かうとする、ということ想定していた。だが、今回抽出された優勢志向の次元は、単なる他者への優越というひとりよがりの意識というよりは、他者に認められたいという他者への開かれた意識の様相を呈するようであった。

3.個人の理想自己タイプとの関連 理想自己に関する4つの志向得点をもとに、クラスター分析を行い、抑制志向・標準志向は平均的であるが優越志向・実現志向が低い、自己実現放棄タイプ(第1クラスター、n=194)、抑制志向が高く、同時に、標準志向や優越志向も高い、抑圧タイプ(第2クラスター、n=65)、優越志向・自己実現が高く、抑制志向・標準志向が低い、自己実現追求タイプ(第3クラスター、n=108)の3タイプを得た。これより、個人を見る場合、自己実現を追求する場合には、優越志向も伴っていること(自己実現追求タイプ)、自己抑制や標準的であることだけを志向する者はあまりおらず、優越志向も伴った中でこれらの意識が強くもたれること(抑圧タイプ)、自己実現への志向性を持たない者は、物事に対する興味や関心が全般的に低いようであることが示された。

各タイプによるアイデンティティ発達および社会意識の差異を一要因分散分析によって検討したところ、アイデンティティ発達のうち、アイデンティティ達成に関連すると思われる得点(アイデンティティ・ホライズン、アイデンティティ情報スタイル、アイデンティティ統合)については、自己実現追求タイプがもっとも得点が高いことが示された。抑圧タイプは、大人感、教育に関するアイデンティティ・ホライズン、EPSIの統合得点などは高い得点を示すのだが、同時に、アイデンティティ不安、アイデンティティ回避および規範スタイル、EPSIの混乱得点などの得点も高く、矛盾した様相をあわせもっていると考えられた。自己実現放棄タイプは、アイデンティティに関する得点のうち、探求や統合に関する得点のみならず、規範や回避・混乱に関する得点も低かった。また、社会意識との関連については、自己実現追求タイプがもっとも開かれた意識を有しており、抑圧タイプがもっとも閉鎖的な意識を有していることが示された。

優越志向は他者からの賞賛を求めるタイプではあるが、同時に、貢献意欲や異質性への関心も高く、よい行いをしようという意識が高いタイプであるようだった。他者からの賞賛という点で、協調的な価値を実現する形式が示唆される。同時に、調査時における社会的望ましさの影響も考慮する必要がある。実現志向の得点が、社会への意識においてあまり開かれているような関連の仕方を示さなかったのは、他者の影響から自己を守って自己実現したいとする意識のあらわれかもしれない。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- 1) Côté, J. E., Mizokami, S., Roberts, S. E., Nakama, R., Meca, A., & Schwartz, S. J. (2015). The role of identity horizons in education-to-work transitions: A cross-cultural validation study in Japan and the United States. *Identity: An International Journal of Theory and Research*, 15, 263-286. (2015年12月, DOI: 10.1080/15283488.2015.1089507)【査読有】

- 2) Côté, J. E., Mizokami, S., Roberts, S. E., & Nakama, R. (2016). An examination of the cross-cultural validity of the Identity Capital Model: American and Japanese students compared. *Journal of Adolescence*, 46, 76-85. ( 2016 年 1 月 , DOI: 10.1016/j.adolescence.2015.11.001 ) 【査読有】
  - 3) 溝上慎一・中間玲子・畑野快 (2016) 青年期における自己形成活動が時間的展望を介してアイデンティティ形成へ及ぼす影響 発達心理学研究, 27, 148-157.( 2016 年 6 月 )【査読有】
  - 4) Sugimura, K., Nakama, R., Mizokami, S., Hatano, K., Tsuzuki, M., & Schwartz, S. J. (2016) Working together or separately? The role of identity and cultural self-construal in well-being among Japanese youth. *Asian Journal of Social Psychology*, 19, 362–373. ( 2016 年 11 月 , DOI: 10.1111/ajsp.12154 ) 【査読有】
  - 5) Helve, H., Côté, J. E., Svyntarenko, A., Sinisalo-Juha, E., Mizokami, S., Roberts, S. E., & Nakama, R. (2017). Identity Horizons Among Finnish Postsecondary Students: A Comparative Analysis. *Identity: An International Journal of Theory and Research*, 17, 191-206. ( 2017 年 8 月 , DOI:10.1080/15283488.2017.1340164 ) 【査読有】
- 〔学会発表〕(計 11 件)
- 1) Mizokami, S., Nakama, R., Roberts, S., Schwartz, S., & Cote, J. (2015). The role of identity horizons in education-to-work transitions: A cross-cultural validation study in the United States and Japan. *The Society for Research on Identity Formation 22nd Annual Conference*. (Bellingham, US)
  - 2) Sugimura, K., Nakama, R., Mizokami, S., Hatano, K., Tokuoka, M., Nishida, W., & Tsuzuki, M. (2015). Does Separation From Parents Really Matter for Identity Formation?: A Reconsideration With Japanese Adolescents. *The Society for Research on Identity Formation 22nd Annual Conference*. (Bellingham, US)
  - 3) 泉美穂・藤井三和子・中間玲子 (2015). 小・中・高校生の生活経験の様相：ポジティブ・イベントおよび向社会的行動の側面から 日本教育心理学会第 57 回総会，朱鷺メッセ
  - 4) 藤井三和子・泉美穂・中間玲子 (2015). 生活経験と生活満足度との関連：ポジティブ・イベントと向社会的行動を指標として 日本教育心理学会第 57 回総会，朱鷺メッセ
  - 5) 中間玲子・杉村和美・畑野快・溝上慎一・都筑学 (2015). アイデンティティスタイル尺度第 5 版 (ISI-5) 日本語版の作成 日本心理学会第 79 回大会.
  - 6) Nakama, R., Sugimura, K., Mizokami, S., Hatano, K., & Tsuzuki, M. (2016) The sense of identity in the twelfth grader in Japan: Its distinctive features and the relationship with parental relationship, ISRI and well-being. *The 23rd Annual ISRI Conference*. (in Baltimore, Maryland | Hilton Baltimore)
  - 7) Sugimura, K., Nakama, R., Mizokami, S., Hatano, K., & Tsuzuki, M. (2016) The relationships between separation, connectedness, and identity: A reconsideration with Japanese adolescents. *The 31st International Congress of Psychology (ICP)*. (in Yokohama, Japan | PACIFICO Yokohama)
  - 8) Nakama, R., Mizokami, S., Sugimura, K., Hatano, K., & Tsuzuki, M. (2016) The cross-sectional study on identity development from late childhood to middle adolescence. *The 31st International Congress of Psychology (ICP)*. (in Yokohama, Japan | PACIFICO Yokohama)
  - 9) 中間玲子 (2016) 青年期の自己意識の発達の变化(2)：相互協調的自己観・相互独立的自己観の様相の検討 日本教育心理学会第 58 回総会，サンポートホール高松・かがわ国際会議場
  - 10) 中間玲子 (2017) 青年期の自己意識の発達の变化(3):理想自己の様相を検討する 日本教育心理学会第 59 回総会，名古屋国際会議場
  - 11) Nakama, R. (2018). Identity development among high school students in Japan. *At the Conference on EARA*. (Ghent University, Ghent, Belgium)
- 〔図書〕(計 2 件)
- 1) 梶田叡一・中間玲子・佐藤徳(編) (2016). 現代社会の中の自己・アイデンティティ 金子書房,
  - 2) 中間玲子編著 (2016). 自尊感情の心理学：理解を深める「取扱説明書」 金子書房.
- 〔産業財産権〕  
出願状況 (計 0 件)  
取得状況 (計 0 件)
- 〔その他〕特になし

## 6. 研究組織

研究分担者，研究協力者，共になし。

科研費による研究は，研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため，研究の実施や研究成果の公表等については，国の要請等に基づくものではなく，その研究成果に関する見解や責任は，研究者個人に帰属されます。